
神様のスタンプ帳

虎太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のスタンプ帳

【Nコード】

N3438Y

【作者名】

虎太郎

【あらすじ】

ひよんなことから神様見習いの女子高校生三人と部活をするこ
とになった、普通の男子高校生の神鳥祐かんどりゆう。
部長に任命された祐は、天使ひかりあまつか、豊盛ほのかほうじょう、天真春を一人
前の神様にするよう任せられてしまった。

一人前になるためには、神様の成績簿でもあるスタンプを十五個
集めなければならなかった。

そんな彼女たちのスタンプを管理するのが、小さな狐のフーちゃん。

神様として正しい行いや正しい振る舞いをする事で、フーチャ
んからスタンプを押してもらえるとというルール。祐は戸惑いなが
らも、彼女達三人と共に部活動に励んでいくのであった。

巻 『二百円が運んだ縁』（前書き）

作者より

授業にて『部活』『濃いサブキャラ』『40×34で25枚程度』
『意外性』という

無茶苦茶なテーマを出された際に作った作品です。

どうぞ、タイトルに引かれた方々、一度ご拝見あれ。

「神様のメ 帳じゃねえか！」

というのはその後で……w

それでは、失礼致します。

巻 『二百円が運んだ縁』

五月最大の連休が終わって間もない平日。

朝早く、バスに乗ろうとしている時に、自分の目の前の人^がもたもたとしているところを見かけたら、どう思うだろうか。

十中八九『早くしろよ』と思うだろう。それは、神鳥^{かんどりゆう}祐も同じだった。

「どどど、どうしよう……サイフ忘れちゃった。え？ だから定期はボクが」

同じ学校の女子生徒が料金箱の前であたふたしており、尚且つ手に持ったカバンに向かって一人で話していた。

普通なら彼女に関わることはしないだろう。面倒だし、どこから見ても拳動不審者だ。

しかし、祐はそんな彼女を見てつい 二百円を小銭入れから取り出し、料金箱に投入した。

「すみません。この娘知り合いなんです」

祐の言葉に、運転手は帽子の鍰を軽く摘み、会釈する。

やれやれ。昔のクセでつい助けちゃったな。

自分の根底に眠る正義感に呆れ、手前のつり革を掴んだ。

普通に生活している上で何気ない出会いがあった。ただそれだけの一日になるはずだった。

少女の一言が無ければ。

「わわわ、その 今の二百円、出して下さい！ お願いします！ 返して下さい……！」

驚いたことに、その声は先ほどの少女のものだった。運転手に向かって必死に訴えている。

「お願いです、早く 早くしないとっ」

慌てた様子の女子生徒に、運転手も困り果てた様子で「はあ」だの「うーんと」だのと、まごついていた。

と、もぞもぞとカバンが蠢いたと思うと、隙間から何かが飛び出してきた。

それは生徒手帳と変わらないほど小さい狐だった。

白い狩衣かりぎぬをたなびかせ、黒光りするハンコを振りかぶって現れた小さな狐は、ためらいもなく少女の頭に叩きつけた。

「このつバカもんが!!」

ゴインツ、と硬い頭蓋骨に当たった音が響く。思わず頭を抱えてうずくまる女子生徒。

「定期は忘れるわ、サイフは忘れるわ……あげくの果てには人間に助けられるわ! 本当に神になるつもりか!? 全く スタンプ一個、ボツシュート!!」

「ええ!? そんな、没収だけは……う、うわあああん!!」

バスの中で泣き出す少女。腫れ物を扱うように、誰もが少女に声をかけられなかった。

と。小さな狐と目が合う。

私が見えているのか?

そう問いているような瞳だった。

祐は中学生の頃から唐突に、霊魂や幽霊といった類の物が見えるようになってしまった。それからというもの、死んだことに気づかない幽霊はたくさん目の当たりにしてきた。

実際に、このバスにも何人かの幽霊が紛れ込んでいる。俯き、青白い顔で会社に通おうと乗り込んできたのだ。

しかし、今こうして相對している狐が、それとは同列のものとは感じられなかった。

動物霊も何度か見てきた祐だが、それはどれも生首だけだったり、足がないだけの動物だ。

目の前の狐はうずくまる少女の背中に二本の足で立っており、そこからこちらを見上げている。神社の神主のような着物も着ているし、そもそも言葉を喋っている時点で普通の幽霊ではなかった。

祐は、離れた場所に佇んでいる会社員の幽霊を見やる。そして、

次に狐へ視線を戻す。

死に掛けている存在の幽霊は、どこか透けていて弱々しい印象を受ける。だが、狐はそこにいることがまるで当然のように色が濃い。この世の物と同じくらいはつきりとしている。

「う、う……」

思わず、人の間を縫って奥へと移動する。

誰も「狐がいる」と騒がないことが、あれは普通のものではないと示していた。

そしてそのまま、いつも降りるはずのバス停の一つ手前で降りた。女子生徒を乗せたバスは、そのまま東城高校前へと向かっていった。そんな今朝の出来事を忘れかけていた時、二時間目の授業が始まって間もない時間に一本の放送が入った。

『びんぽんぱんぽーん』

あー、あー、本日八晴天ナリ。んんっ！ どーも、校長先生です。

神鳥祐君に告げる。放課後に一階の廊下の奥の空き教室に来てね。校長との約束だぞおっ。

びんぽんぱんぽーん』

勉強に勤しむ祐の日常を壊したのは、そんな間の抜けた、校長の放送だった。

この時、祐は自らにかけられた運命など、知る由もなかった。

式 『そして部活設立 っつて、それでいいん会!?!』

陽が傾きかけた午後四時二十分。一日の授業が終わったことを告げるチャイムが校舎の中に響き渡る。これは六時間目終了のチャイムではなく、HRが終わり、その十分後に鳴るものだ。

このチャイムは「授業がないですよ」という最終確認と同時に、部活動が始まる意味も兼ねていた。

生徒が帰宅か部活にいそしむ中、人気のない廊下の一番奥にある一室。中には三人の女子生徒と一匹の狐がいた。その内の一人と一匹とは、朝のバスの一軒で見覚えがあつたが。各々は四角に並べられた机に座っていた。狐だけは例外で、机の上に乗っている。

訳が解らないまま、祐は椅子に座った。

「さて、これは一体どういうことでしょう」

着物を着た一人の女子生徒が、不機嫌そうに声を漏らした。

「なぜ、私達まで集められているのでしょうか？」

人形のように美しい顔に一筋の線が浮き上がる。またの名を青筋という。

「いや、俺も聞きたいくらい」

「あなたに発言権はありませんよ家畜糞」

詩を読むような声で、着物の女子がピシヤリと遮る。初対面だといふのにウンコ呼ばわりと、容赦が無かった。

「それに、この牛糞男が部長とはどういうことですか。フーちゃんさん」

机の上の狐に、そう問いかける。フーちゃんさんと呼ばれたのは、今朝に見た狐だった。

「春、それは校長の決定なのだ。それに、校長よりも強い縁が結べるとでも言うのか？」

着物の女子 春は、まるで泥でもかけられたかのように、明ら

かな嫌悪の色を顔に出した。

「私が別天津神ことあまつがみほどの力を有しているとでも仰りたいのですか？

それなら大層な過大評価ですね。これは褒められたと受け取れば宜しいですか？」

「相変わらず口が減らん、七光り。八意思兼神おせいかねから授かった知識は頭で使うのではなく、口で使うものだったか？」

「神使しんしの分際で御父様を愚弄する気ですかクソギツネ。稲荷はクソでもして、田畑を耕してなさい。お山は向こうですよ？」

怖い。とりあえずコトアマツとかシンシとかよく解らないが、自分を挟んで両者の間に火花が散っているのは確かだった。祐は肩をすぼめて小さくなった。

「まあまあ……落ち着いてよ春。それにほら、縁が結ばれた以上はボクからもここに来るしかないんだし」

「ひかりは黙っていて下さい」

落ち着いた声音で春に話しかけたのは、祐が二百円を払ってあげた、あの女子生徒だった。

「まあさー、はるるの言うことは解るんだよねー」

と、ここにきて一番背の低い、二つおさげの女子生徒が口をひらいた。

「さっき、フーちゃんさんが言ってたじゃん。『部活に参加していれば、後は好きにしてい』って。それってさー、好きに部活していいってことでしょ？」

「確かに『なにそれをしる』とは言われていませんでしたね。ただしその間、この 馬糞と共に時間を過ごさなければなりません」

汚らわしいものを見るように、春が視線を向けた。そしてあざ笑うように春が言う。

「なるほど解りました。今回のことで異論はありません」

両肩に重たくのしかかっていた空気が霧散する。

フーちゃんも頭を冷やしたのか、やれやれと肩をすくめる程度だ

った。

「ボクも異論は無いです」「アタシもー」

ひかりとおさげの女子は不満がなかったのか、すんなりと了承した。

「解った 神鳥、おまえは私と共に校長室に來い」

「ええ……」

「バカもん、オマエは部長だろう。部員が全員了承したんだ、今から手続きを済ませに行くぞ」

「俺がなりたかったわけじゃないのに」

「何か言ったか？」

「いいえ、何にも」

言い終え、フーちゃんは祐の頭に飛び乗る。そして一人と一匹は並んで校長室に向かった。

「失礼しまーす……」

何故か職員室に入ろうとすると、緊張してしまう。疚しいことが無いのに、警察官とすれ違った時と同じ感じだ。その奥にある、一際立派なドアが校長室の入り口となっていた。

「失礼します、校長」

中はいたってザ・校長室ウー！ といった内装だ。黒光りする革張りのソファ、ラックに納められたトロフィー、額に入った校訓。バカでかい社長机と社長椅子。

「お、来たねー。どうだった？ 春とかうるさかったんじゃない」

「無理矢理従わされることに不満なんでしょう。全く強情な教え子です……」

あはは、やっぱりね。そう無邪気に笑う校長。

白髪まじりに、無数に彫られた顔の皺。初老の男性が作る笑顔にしては、生き活きとされていた。年老いた可愛らしさ、というやつだろうか。

「きみが神鳥祐君だね。噂は聞いてるよ、フーちゃんからね」

こうして校長と会うのは、祐は初めてだった。

「なるほど。フーちゃんが見えてるだけあるね、言い面構えじゃないか」

「そういえば……フーちゃんさんから部長になるように言われましたが、何の部活とか聞いてないんです。具体的に、何をすればいいのですか？」

「んーとね、部員であるあまつが天使ひかり、ほ豊盛ほうじょうほのか、てんまはる天真春を見ていればいいよ。ただそれだけ」

その後続くのはサルでもできるとか、自給千円とか　怪しい
謳い文句が出てきそうだ。

「ま、正確には人間のキミの視点で、彼女達が神様として正しい振る舞いをしているか見てくれればいいんだよ。困ってたらアドバイスとかしてあげて……ただし、絶対に手助けをしちゃいけないよ」
「手助けはアドバイスと違うのでしょうか？」

「んー、手助けというのはキミが彼女達の代わりに、彼女達の仕事をとってしまうことね。助言は手助けというより、補助って考えてそうしないと、またひかりを泣かせちゃうかもね」

痛いところを突かれてしまった。そもそも、ひかりを泣かせたことがきっかけで、自分が今この場でこんなことになっているのだから。
「まあ、フーちゃんも敵しすぎるんじゃない？　たかがバス代を貸してもらったくらいでスタンプ一個没収なんて」

「その前に、ひかりが定期を無くしたからこうなっただけです」
「あらら、そうなの。校長は仕方ないと言ったように苦笑いした。

「ま、キミはそのとばっちりを受けちゃったわけだ。だけど、見習いとはいえ神に貸りを作るなんて凄いいねえ。そのせいで縁が出来ちゃったけどね」

「ここでも縁か。というかここ最近、縁に振り回されすぎてないだろうか。」

「それこそ『これも何かの縁』というやつだ。そのせいでキミがフーちゃんを見えるようになって、キミとひかりに縁が出来た。それ

を今回、利用させてもらったんだけど……怒ってない？」

本人を目の前に利用したと公言するか。それが祐をイラつかせた。「怒ってたらどうするんですか？」

「あ、怒ってる？」

「怒ってないですって！ さっさと部活の書類下さいよ」

遊ばれているようで腹が立ってしまふ。祐は一刻も早くこの場を離れたい気持ちに駆られる。

「いいですよ、やってやりますよ。利用でも何でもして下さい。ただし、縁つての使わないで下さいよ。何だか首輪を引かれるようで嫌ですから！」

祐は書類をひったくると、校長室を出て行った。

「いやあ、若いっていいね。詳しいこととか何にも聞かずに出てくなんて」

校長は綿の詰まった社長椅子に身を預けると、ケラケラと笑い出した。

「お人が悪いですよ。それに、いい加減引退してくださっても構いませんから……こついつた汚れ仕事は、あなたがやるべきことではありません」

「彼女ら落ちこぼれを面倒見る役をかって出た、エリート神使が言うセリフじゃないね。キミのほうこそ汚れ仕事はしないほうがいい。だからきみは、フーちゃんなんだよ」

「素戔すさのお男尊様……」

心を許した相手にしか見せない笑顔。それはフーちゃんが校長をどれほど尊敬し、信頼しているのかが見て取れた。

「そういえば、部活の名前決めてなかったねえ」

祐が持つていった書類はあくまで『私が部長をやります。ええ、やりますとも』という誓約書のようなものだった。もともとは校長が主となって作る部活なので、本来なら部長の役目は校長がしなければならぬ。が、そこを『部活顧問』という立場で見守るとい

のだから話は別だ。例えるなら、オーナーが校長で、店長が祐だ。
「くれぐれも、安易な名前にしないで下さいよ。機嫌を損ねた春が、
目に浮かびます」

「はいはい。んじゃー、えーっと……コレにしようかな」

校長はペン立てからボールペンを掴み、鼻歌まじりに筆先を走ら
せた。

『部活・同好会名：キミは神様を信じてる会』

あれから数日後。ようやく活動が始まると思ってやって来た祐を
待っていたのは、にわかには信じられない事実だった。

部室と指定された部屋の扉に貼り付けられた『キミは神様を信じ
てる会』と書かれた一枚の紙。この際、つまらないダジャレは抜き
にしても

「会って……部活ですらないじゃん！」

「オース、ぶちよー」

突っ込みを入れたところによって来たのは、おさげの女子だった。
彼女は張り紙を見るなり

「な、な、な……なんじゃこりゃあー！！」

叫びながら、真正面から祐に突進　もといスピーアータックルを
喰らわせた。

どんがらがっしゅーん。

背後の扉を破壊しながら、二人は入室した。散らばるガラス、真
つ二つに折れた木製扉。

部室の時計が四時二十分を指し示す。放課後のチャイムが部活動
の始まりを告げたのだった。

参 『神々の集う教室』

スピアを喰らってから数分後。ボロ雑巾のように部室の床に打ち捨てられていた祐は、ひかりの発見によって一命を取り留めたのだ。話を聞くと、水揚げされた鯛のように跳ね回っていたという。

そういうのを痙攣っていうんだけどね。おまけにいびきをかいてたというのだから、脳内出血か脳挫傷を起こしている可能性もあったかもしれない。神様ありがとう、見つけてくれて。

で。今は何をしているかというところ。

「改めて初めまして。ボクは一年三組の天使ひかり。親は天火明命あめのほあかりで、御婆ちゃんあまてらすおおかみは天照大神なんだ。よろしくね」

自己紹介の最中であつた。長い髪を後ろで括り、単純な形のハイフアップが印象的な女子だ。

バスの中でサイフを忘れてあらふたしていた子だ。

一礼して、ひかりが着席する。続いて、気だるそうに祐へ危害を加えた少女が立ち上がる。

「えーと、豊盛とよなりほのか。二年二組、母親は豊宇気毘売神とよひびと。ひかりんとは親同士の付き合いね 終わり」

どうやら彼女は上級生だったらしい。その割には立ち振る舞いや身長が幼すぎると思うのだが。祐は一人、突っ込みを入れる。ほのかに着席すると同時に、今度はロングストレートの髪の少女が立ち上がる。

「一年二組、天真春と申します。天上春命あめのつわはるのみこと、天下春命あめのしたはるのみこと、誇り高き八意思兼神の御子神みこがみです。どうぞ、よしなに」

ひかりとは違い、ふかぶかと頭を下げる。見事な髪が流れるように垂れる。

三人の紹介が終わり、祐はつくづく自分には後ろ盾がない人間だ

と、つくづく痛感した。

ひかりの祖父である天照大神は、言わずと知れた現時点での最高神だ。どのくらい凄いかというと、ジム・ロスが「超スゲエ、超スゲエ」と連呼するくらい凄い。

天火明命だつて、愛知県一宮市の真清田神社ますみだじんじやに祀られている、立派な神だ。

ほのかの母である豊宇気毘売神も相当な神であり、天照大神に「一人で食事するのは寂しいから」と言つて、呼び寄せられたのが原点である。親ぐるみの仲とは、こういつた経緯があつたからだ。

春の親である八意思兼神に至つては、天戸隠れの際に天照大神を外に出すために八百万ややおよその神に知恵を授けたことが有名で、そもそもは思考・思想・知恵を神格化した神様なのだ。ついでに御子神とは、その神の子供という意味なのだそうだ。

ついで、机に座るフーちゃんが立ち上がる。

「フーちゃんだ。伏見稻荷出身、宇迦之御魂大神うかのみたまのおおかみ様の神使で、宇迦之御魂大神様の父である素戔尊様すさのおの下で、未熟な神の教育係として働かせてもらっている」

ちなみに、フーちゃんが正しい名前なので、さん付けするとフーちゃんさんになってしまう。ただし、変だからと言つて「さん」を付けないと、どこからともなく「さんを付けるよデコ助野郎！」と聞こえてくるらしい。それはまるで囁くような呟きだという。

そのような呟きを「ツブヤイッター」というらしい。神様の世界も複雑のようだ。

「ほら、次はキミだよ」

ひかりに促され、祐が立ち上がる。

「え、ええと一年一組の神鳥祐です。父親は公務員で、地下鉄の駅員をしています。母親はカーテンの裁縫店でパートしてます……」

なんだか悲しくなってきた。それでも父親が公務員ってというのは誇りなのに、神様達を目の前にはちっぱけなものに思えてくる。自己嫌悪に陥りつつ、祐は着席する。

「よろしくね。祐君」「よろよろー、ぶちよー」「よろしくお願
しますカマドウマ」

最後のはいいや、もう。糞の次は不快害虫かよ、なんて突っ込
だら負けだと思っから。

「では、いいかな？ 早速スタンプについて話そうと思うのだが」
フーちゃんの言葉に示し合わせたように、三人は机の上に一冊の
スタンプ帳を置いた。

一般的なパスポート風の形で、表紙はジャポニカ学習帳のような
味気ないものだ。

「彼女ら見習いの神は人間の生活の中に紛れ込み、人の心を理解す
る。それが終了すると、今まで学んできたことを実践するために、
困っている人間を助けるなどしなければならぬのだ」

「研修みたいなもの、ですか」

祐の呟きに、そんなものだと言ったと相槌を打つフーちゃん。

「うむ。人を助けると言うのはあくまで一つの手段に過ぎない。研
修の最終的な評価は『神として正しい振る舞いをする事』にある。
そして、その評価を示すのが このスタンプだ」

どこから取り出したのか、フーちゃんは自分の身の丈ほどある木
製のハンコを取り出した。

「神として正しい行いをしたら、その行動に応じた数のスタンプを
与える。ただし、神として正しくない行いをした場合は……」

言い終える前に、チラリとひかりを見やる。猛禽類に睨まれた獲
物のように、しゅんと萎む。

「先日のひかりのように、スタンプを一つ没収させてもらおう」

「つまり、正しい行いをしていればスタンプは増えて、逆に人間に
助けられたりへまをすれば、逆に減っていくと。一種の成績のような
ものですね」

「お、あつたまいいなーぶちよー」

ほのかの童顔が、にんまりと笑顔を作る。

「アタシらは神様だから、学校の成績は関係ないんだよ。だから、

テストで何点とっても怒られな〜い！」

「ま、バカだという証明にはなりませんけどね」

その隣で呟く春。当の本人のほのかはというと、聞こえていないのかへらへら笑っていた。

「ボク達はそのやっつて、正しい神様になるよう頑張ってるんだ。学期末までたくさん集めなくちゃいけないんだけどね」

「へえ。何個くらい？」

「最低でも十五個かなあ」

「へえ〜。意外と……少ないッ」

たくさんと言ったから百個かと思っちゃったよ。

「少ないというが、彼女達にとってはえらく難しいことだな……」

小さな歩幅で机を横断すると、フーちゃんはひかりのスタンプ帳を捲った。

たくさんマス目が並ぶ中、ひかりの集めたスタンプはというと

「よ、四個……ですか」

十五個目のマスに『もくひょう！』と書かれていた。ひかりの可愛らしい一面を垣間見たのはいいが、それがまるでおバかな子が写したノートのように、見ていて哀愁を感じてしまう。

「こ、この前までは五個あったんだよ！ バスの定期をなくす前は……」

どうやら、彼女達にとっては一個集めることがかなり難しいことらしい。続いてほのか、春とスタンプ帳を捲るが、どれもこれもどんぐりの背比べだった。

「神鳥。お前はこの部活 もとい、同好会を取りまとめる部長として、神と縁ができた者として、彼女達を一人前の神になるよう、手助けをしてくれ」

これもひとつの縁なのだろうか。祐の胸に一つの疑問が湧き上がる。

縁とは、人と人を結びつける縁を思い浮かべるが、実は神様や幽

霊などにも通用するものだった。普通の人間の言葉は神様や幽霊には聞こえるが、逆に神様や幽霊の声は人間には聞こえない。そこで神様や幽霊の『声』を聞くと、コンタクトがとれるようになってしまったのだと、フーちゃんは言っていた。

また、強力な縁にもなれば、こうして四人と一匹が『強制的』に集められるくらいの力となる。言うなれば磁石が引き寄せられるに否応無く、だ。今回の場合は、S極がこの教室で、N極がこの場に
いる全員と思えば解りやすいだろう。

こうして祐は、縁という見えない力によって、見習いの神様を取りまとめる部長となったのだった。

肆 『御利益は鉄の味！ 目覚めよ、ほのか！』

で、結局何すればいいんだ。

祐は一人、誰もいない部室で呟いた。部活の開始には少し早い時間だった。

見習いの神様達がスタンプをもらえるようにするのが、部の主な活動内容だ。しかし、具体的に何をどうすればもらえるとか、祐は一切アドバイスがされていなかった。

「旋風回転脚！」

ズバアァン！ と扉が無造作に吹っ飛んでいく。

「ちよ、ええ！？」

驚いて振り返る祐の頭上で、フライング・ダブルニー・ドロップのまま落ちてくるほのか。

「続いて……爆砕！ 重・落・下！！」

捲れあがるスカート、丸見えの苺柄の下着。ゆっくりと、鼻先に近づいてくる柔らかかそうな生足。だが、見た目に反して膝というのは人体における凶器であり、メキツと音を立てて祐の顔面に直撃した。

祐が床に倒れる直前、ほのかは素早く飛びのくと、両手を合わせて残心をとる。

「おっはー、ぶちよー」

「お、おはよう御座います先輩……」

「今日は体育があったおかげで電池消費が激しかったんだ。ファイナルアタックできなくて良かったな、ぶちよー」

「ソレは何よりで……ところで、なんで俺にそんな技をかけたんですか」

「んー？ だって、ぶちよーってガルファに似てるから」

（俺が悪いのか？ 俺が機械生命体に似ているから悪いのか！？）
クリーンヒットした鼻を押さえつつ、目に涙を浮かべて起き上が

る祐。

「ちよ、ちよちよちよ……どうなってるのコレ!？」

たった今やって来たひかりは、すぐにこの惨状に気づき、あわてふためいた。

「わー、わー！ 血が、血が凄いで出るよ祐君!? こういう時どうすればいいんだっけ」

「大丈夫、大丈夫。上向いてれば勝手に止まるから」

と、着席して上を向く祐の視界に、黒衣着物の少女が映る。祐の見間違えでなければ、その少女はカモがネギを背負ってるとも言いたげに、嫌らしいほど禍々しい笑顔をしていた。

「ひかり。そういう時はね、後ろから首を叩いてあげるといいわ。手刀で首を刈り取るように叩き込むと、血流が止まって血が出なくなるから」

「違う！ 断じて違う!! 刈り取るようにって何だよ、収穫時期の稲穂じゃないんだぞ!？」

「ちが」

訂正しようと口を開いた瞬間、風を切るような「ヒュンツ」という音をたしかに聞いた。

「ツセイ!」

首筋にたしかな痛みを感じた。ギャグマンガなら目玉が飛び出す勢いだった。しかし、現実には非情で、飛び出したのは祐の目の玉でなく、鼻から下りてきた鮮血だった。

「ブパア!」

歯や口、舌のつけねあたりに溜まったソレは唾液と共に飛散し、吐血するように 正面でニヤニヤしている春に目掛けて飛来した。

「あはは は？」

苦痛に歪む祐を見て笑っていた春。その白い頬に、筆でなぞったかのような飛び血が付着する。また、霧吹きのように黒衣着物、覆われていない手、校内用の白い靴 それら全てに祐の唾液と血が飛んだ。

「わ、わ、わ！ ちょっと春、全然違うじゃないか　　って、春？
ひかりのすつとんきょうな声に顔を上げると、そこにはお面を貼
り付けたように笑みを崩さない春が、祐を見詰めて　　いや、睨ん
でいた。」

「は、は、は。フナクイムシ、これは何？」

「サー、それは血です、サー」

祐は本能的に何かを察し、言葉の前後にサーをつけてしまう。

「誰の血かしら？」

「サー、俺の血です、サー」

「あら、あなたの血は赤だったかしら？　私は緑だと思っただけ
ど」

不気味なアルカイツク・スマイルを近づけ、冷徹な瞳で祐の双眸
を刺しうがっ。

「ひかり、ごめんなさい。間違えたわ……こういう時は鼻に栓をす
るの　指で」

「サー！　それは違います！　サー！！」

これから起こりえる事態を瞬時に想像し、必死に訴える祐。

しかし、一方の春は落ち着いた声音でひかりに近づいた。

「大丈夫、ウジムシ　彼は恥ずかしがっているだけです。あなた
にしてもらうのが恥ずかしいだけですよ。男の子は、女の子に粗相
の始末をされるのが、照れくさいだけです」

「サー！　大丈夫です！　もう止まります！　止まりかけてます！

サー！！」

「ほら、暴れると血が上って止まらなくなりますよ。ひかり、早く
止めないと彼の全身の血は枯渇してしまいます。一刻を争うです
よ」

「そ、そうなの！？　大変じゃないか　ちょっと退いて！」

「コツはピースサインを作って、思いつきり深く刺すの。そうする
と、すぐに血が止まるわ」

「サー！　もう大丈夫です！　サー！！」

「あ、言い忘れてたわ。えぐるように、手を裏返しにして刺すといわよ」

「サー！ すいませんでした！ 許して下さい！ もうしません！ サアアア！！」

「んー、助走をつけて刺すと深く刺さるかも」

「解ったよ、春。これも人を助けるため、ひいてはこれが後のスタンプ集めに繋がるんだね！」

頼む！ バカは一人でもいい、暴力キャラはほのか一人で十分だ！ 心の中で銀河なんたらばりに喉を鳴らし、心の中で叫び訴えかける。

「そこでいいわ。それ以上、後ろに下がれないし」

（おおお！ 我が胸に封じられし超能力よ、今こそ、その力を示せええ！！）

「じゃあ、行くよ！」

（世界よ滅びよ！ バルス、バルス！！）

「さようなら、フシダニ」

決りこむように放たれたひかりの指が鼻に到達する直前、春は確かにそう言った。

本当にこんな神様達を導けるのだろうか。激痛に薄れ行く意識の中、祐は自らの宿命を呪った。ちなみにこの後、ひかりのスタンプが一つ減ったのは、言うまでもなかった。

肆 『御利益は鉄の味！ 目覚めよ、ほのか！-!』 (後書き)

どう考えても、目覚めるのはほのかではなく、祐君が「DM」に目覚めろって話ですよね。

この話を書いた後から、ほのかが好きになりました。

元気で、明るいキャラ。

そして何より扱いやすい性格なので、ちょこちょこ出しやすいんですよね。

次の話は、春の話となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3438y/>

神様のスタンプ帳

2011年11月9日03時10分発行